

遊離数量詞の構成素性について*

木 村 宣 美

0. はじめに

日本語には、次の(1)に示されているように、数詞(numeral)と分類辞(classifier)から成る数量表現(Numeral + Classifier: NC)が名詞を修飾する方法に2種類ある。(1a)では、NCが名詞を形容詞のように前位から修飾し、他方、(1b)では、NCが前位の位置から後方に遊離し後位から名詞句を修飾している。このような構文は遊離数量詞(floating quantifiers: FQ)構文と呼ばれる。

- (1) a. 5人の学生が来た。
b. 学生が5人来た。

(1a)の「5人の学生」が名詞句という構成素を成すことに関しては見解の相違はないが、遊離した数量詞(numeral quantifier: NQ)とそれが修飾する名詞句(NP-Case)、すなわち、(1b)の「学生が5人」が構成素を成すのかどうかに関しては、意見の一致を見ていない。この遊離数量詞の構成素性(constituency)に関しては、概略、1)NQとNP-Caseが構成素を成すと分析する単一構成素仮説(single constituency hypothesis)(神尾1977、1983、Kawashima 1998、Muromatsu 1999¹)、2)NQとNP-Caseが構成素を成さず動詞句に支配されていると分析する基底生成仮説(base-generation hypothesis)(Miyagawa 1989)、3)顕在的動詞上昇分析(Koizumi 2000)の3つの分

* 本稿は、「名詞句の内部構造と非顕在的移動の類型論的研究」の研究題目のもと、平成11年度 - 平成12年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)課題番号11610475)の助成を受けた研究成果の一部である。

¹ Muromatsu (1999: 387)は、次の(i)に示されているように、名詞と遊離数量詞が小節(small clause)を成すとするIntegral Relationを提案している。

(i) Integral Small Clause structure: [_{SC} Noun Numeral-classifier]

Muromatsu (1999: 389)によれば、例えば、「えんぴつを2本」の基底構造は(ii)である。

(ii) [_{SC} enpitu ni-hon]

(iii) [_{RP} enpitu o_i [_{R'} R [_{SC} t_i ni-hon]]]

基底構造(ii)のenpituがReference Phrase(RP)の指定辞に移動することにより、(iii)にみる語順enpitu o ni-honが導かれると分析する。この分析は、単一構成素仮説に分類できる。

析が存在する。²

本稿では、遊離数量詞の構成素性を考察の対象とする。本稿の構成は、以下に示すとおりである。第1節では、遊離数量詞の構成素性に関する、単一構成素仮説・基底生成仮説・顕在的動詞上昇分析の3つの分析を概観する。第2節では、顕在的動詞上昇分析を提案するKoizumi(2000)の不備を指摘する川添(2002)の分析を概観し、第3節では、川添(2002)が提案する帰一連鎖と非帰一連鎖を統合する可能性を吟味し、構成素の範疇(categories)に言及する分析を提案する。

1. 遊離数量詞の構成素性

1.1. 単一構成素仮説(single constituency hypothesis)

神尾(1977)は、日本語の変形をめぐる議論との関わりにおいて、数量詞が後置されている(2b)の構造を考察している。

- (2) a. 三人の学生がつかまった。
b. 学生が三人つかまった。(神尾1977: 84)

神尾(1977)によれば、(2b)の「学生が三人」の構造は二通りあり、曖昧である。この議論を、ここで、簡潔に要約することにする。一つ目の可能性は、「学生が三人」が名詞句という構成素を成す。この点を、(3)を例に取り、考えてみることにする。

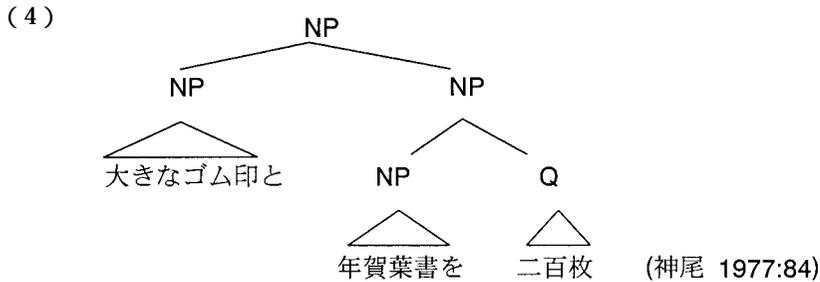
- (3) a. 私は年賀葉書を二百枚と大きなゴム印(と)を注文した
b. 学生が三人と一人の教師(と)がつかまった(神尾1977: 84)

等位接続される句は同じタイプのものでなければならず、名詞句と等位接続されるものは、基本的には名詞句でなければならない。(Chomsky 1957)この普遍的な原理のもとに、(3a)の「年賀葉書を二百枚」と(3b)の「学生が三人」は名詞句でなければならない。というのは、(3a)では名詞句「大きなゴム印」、(3b)では名詞句「一人の教師」と等位接続されているからである。また、

² 奥津(1969, 1983, 1996a, b)は、数量詞とそれが修飾する名詞句には、概略、NQC型・NCQ型・Q/N型の3つのタイプ[N:名詞、Q:数量詞、C:助詞]が存在することを指摘し、本稿で考察するNCQ型の派生に関して、基底構造のNQC型に数量詞移動(Q移動)を適用することによって導かれるとする分析を提案する。他方、神尾(1977)は、Q/N型を基底とし、Q移動の適用によってNCQ型が導かれると主張する。ただし、NCQ型の派生過程は本稿の議論に直接的な関わりはないので、議論することはしない。また、「遊離」数量詞と表記しているからといって、数量詞移動が関与していると主張しているのではなく、説明の便宜上、一般的な用語として用いているにすぎない。

Terada(1990)は数量詞と名詞句に対して、4つのタイプに分類し、名詞句(NP)と数量詞句(QP)の違いに基づく分析を提案し、Kitahara(1993)は、遊離数量詞を含む名詞句の精緻化を行い、かき混ぜ(scrambling)には特定効果(specificity effect)があることを指摘している。

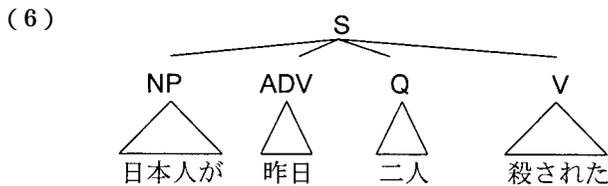
Ross (1967)が提案する、等位構造を成す被接続要素(conjunct)の片方だけに規則の適用は許されないことを規定した等位構造制約(Coordinate Structure Constraint: CSC)から、(3a)の「二百枚」が等位構造「大きなゴム印と年賀葉書」の外側にあるはずがなく、その内部になければならない。この議論から、例えば、(3a)の「年賀葉書を二百枚と大きなゴム印」の構造は、概略、(4)となる。



二つ目の可能性は、名詞句と後置された数量詞が構成素を成さない場合である。この点を、(5a, b)を例に取り、考えてみることにする。

- (5) a. 日本人が昨日二人殺された
 b. 本を早速一冊お送りしましょう(神尾1977:85)

(5a, b)では、名詞句と後置された数量詞の間に、副詞「昨日」、「早速」が介在している。従って、(5a, b)の下線部が一つの名詞句を成しているとは考えられず、例えば、(5a)は(6)の構造をしていると、神尾(1977:85)は指摘する。



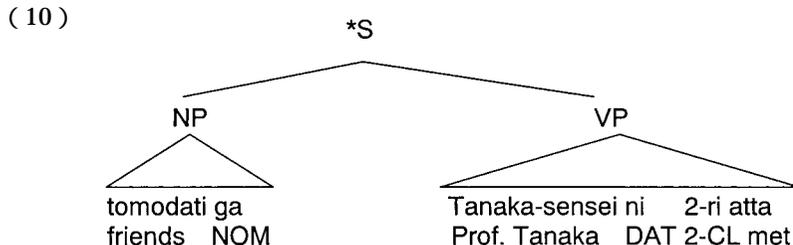
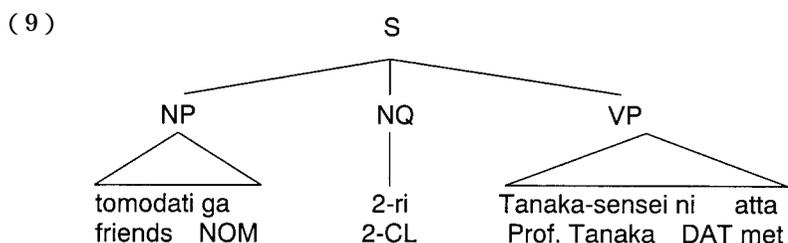
1 2 . 基底生成仮説(base-generation hypothesis)

Miyagawa (1989)は、遊離数量詞(NQ)と名詞句(NP-Case)が隣接している場合もあれば、隣接していない場合もあることに着目し、(7)と(8)の文法性の違いがNQと名詞句には叙述(predication)の関係があり、相互に構成素統御(α constituent)command)しなければならないとする条件、Mutual C-Command Conditionで説明できると主張する。

(7) Tomodati ga 2-ri Sinzyuku de Tanaka-sensei ni atta
 friends NOM 2-CL Shinjuku in Prof. Tanaka DAT met
 'Two friends met Professor Tanaka in Shinjuku.'

(8) *Tomodati ga Sinzyuku de Tanaka-sensei ni 2-ri atta
 friends NOM Shinjuku in Prof. Tanaka DAT 2-CL met
 'Two friends met Professor Tanaka in Shinjuku.' (Miyagawa 1989:28)

(7-8)の構造は、Miyagawa (1989 : 29)によれば、次の(9-10)である。



Miyagawa(1989)のMutual C-Command Conditionから、(7)と(8)の文法性の違いに説明を与えることができる。(7)では、NP-Caseのtomodati gaとNQである2-riが相互に構成素統御しているので叙述の関係が成立しているが、(8)では、tomodati gaはSに、他方、2-riはVPに支配され、NQと名詞句の間に相互に構成素統御するという関係が満たされていないので、叙述の関係が成立せず非文法的となると説明する。このように、Miyagawa(1989)は、構造(9-10)から明らかのように、名詞句とNQは構成素を成さず、動詞句あるいはSに支配されていると分析する。すなわち、名詞句とNQは自由に基底で生成され、その的確性はMutual C-Command Conditionを満たしているかどうかによると提案している。

1 3 . 顕在的動詞上昇分析(Overt Verb Raising Analysis)

Koizumi (2000)は、日本語のように主要部が最後に来る(head-final)言語にも、顕在的動詞上昇が存在することを指摘し、主要部パラメーター(the Head Parameter)を擁護する議論を展開している。その議論を詳しく見る前に、Koizumi(2000)が仮定する節構造のメカニズムを明らかにしておく必要がある。Koizumi(2000)は、Agr-less VP-shell analysis of the clausal architecture (cf. Chomsky 1995, 1998)を仮定する。すなわち、目的語等の内項(internal arguments)は、軽動詞(light verb)vの補部である動詞句という最大投射内に生成され、主語である外項(external argument)は軽動詞vの指定辞(specifier: Spec)に併合(merge)される。また、外項は顕在的にIP(あるいはTP)のSpecに上昇する。この分析に従えば、(11)の文の構造は(12)となる。³

(11) Mary-ga John-ni ringo-o age-ta
 Mary-Nom John-to apple-Acc give-Past
 'Mary gave an apple to John.'

(12) $[_{CP} [_{IP} \text{Mary-Nom}_i [_{VP} t_i [_{VP} \text{John-to} [_v \text{apple-Acc gave}]] v] I] C]$
 (Koizumi 2000 : 228)

Koizumi (2000)が仮定する節構造と日本語の顕在的動詞上昇に関わる議論をここで概観することにする。日本語の顕在的動詞上昇を支持する現象の一つとして、等位接続(coordination)に関わる現象が取り上げられている。この点を、次の(13)を例に取り、考えてみることにする。

(13) Mary-ga [[John-ni ringo-o 2-tu] to [Bob-ni banana-o 3-bon]]
 Mary-NOM John-to apple-ACC 2-CL and Bob-to banana-ACC 3-CL
 ageta (koto)
 gave (fact)
 'Mary gave two apples to John, and three bananas to Bob.'

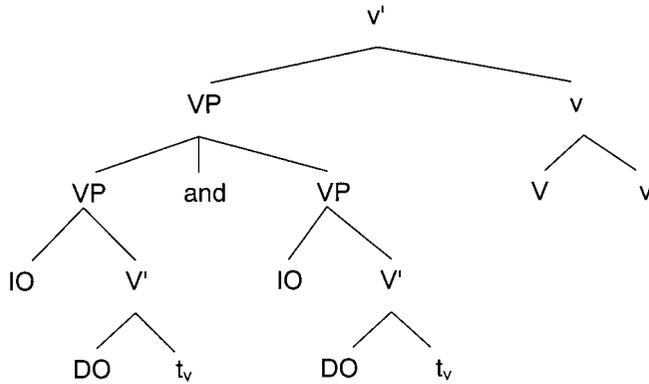
(Koizumi 2000 : 228)

一般に、等位構造のそれぞれの被接続要素は統語的な構成素でなければならない。また、通例、間接目的語(indirect object)と直接目的語(direct object)は、統語的構成素(syntactic constituent)を成さないことが知られている。(13)では、あたかも間接目的語と直接目的語が「統語的構成素」を成し、等位接続されているように見える。しかしながら、このような等位接続は、等位構造に課されている一般的制約に抵触し、許されない。この矛盾を解消するのが顕在的動詞上昇の適用であ

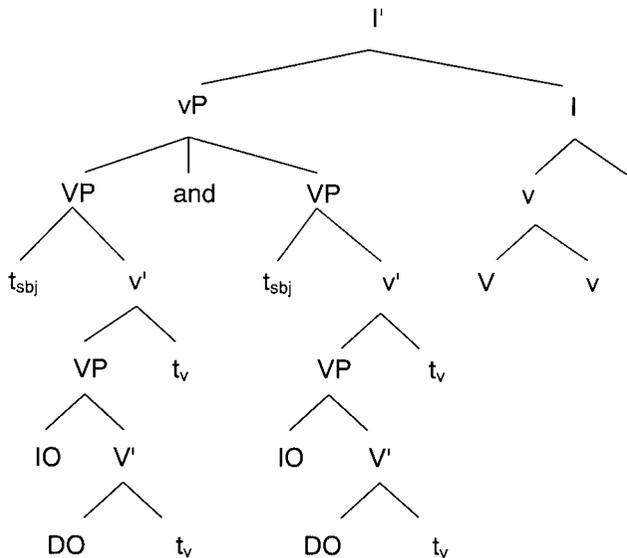
³ 厳密に言えば、節はTPあるいはIPと分析される。しかし、本稿の議論においてTPとIPの区別は問題にならないので、以降は、節をIPと表記することにする。

ると Koizumi (2000) は主張する。Koizumi (2000) によれば、(13) では VP あるいは vP が等位接続されていて、主動詞 (main verb) が全域的に (across-the-board)、そして顕在的に v に上昇していることを示している。この分析に従うと、(13) の可能な構造は (14a, b) となる。(IO は間接目的語、DO は直接目的語を表す。)

(14) a. VP-coordination



b. vP-coordination



Koizumi (2000 : 229)によれば、(14a)では顕在的動詞上昇の適用から導かれたVPsが、(14b)ではvPsが等位接続されている。このように、顕在的動詞上昇が日本語にも存在するとするならば、(13)が、等位構造に課されている一般的制約[1)同じ範疇が等位接続される、2)統語的構成素が等位接続される、3)片方の被接続要素からの要素の取り出しは許されない]に何ら違反していないことになる。⁴

Koizumi (2000)は、遊離数量詞の構成素性に関して、顕在的動詞上昇を仮定することで、神尾(1977)の単一構成素仮説が基底生成仮説より優れているとする議論は、もはや成立しないことを指摘する。この点を、次の(15)を例にとり、考えてみることにする。

(15) [[Gakusei-ga 2-ri] to [sensee-ga 3-nin]] kita (koto)
 students-NOM 2-CL and teachers-NOM 3-CL came
 'Two students and three teachers came.' (Koizumi 2000 : 262)

(15)の[[Gakusei-ga 2-ri] to [sensee-ga 3-nin]]は、神尾(1977)によれば、名詞句[gakusei-ga 2-ri]と名詞句[sensee-ga 3-nin]が等位接続された名詞句である。しかしながら、顕在的動詞上昇を仮定するKoizumi(2000)では、次の(16)に示されているように、まったく異なる分析が可能になる。

(16) [_{IP} [_{IP} Gakusei-ga 2-ri t_v] to [_{IP} sensee-ga 3-nin t_v]] kita_v]

構造(16)から明らかなように、(15)は文と文が等位接続されたIP-coordinationであると分析することができる。また、(15)のような文をIP-coordinationであると分析すべき証拠として、副詞が含まれている文の存在を指摘する。

(17) [[Gakusei-ga kinoo 2-ri] to [sensee-ga kyoo 3-nin]] kita
 students-NOM yesterday 2-CL and teachers-NOM today 3-CL came
 'Two students and three teachers came.' (Koizumi 2000 : 263)

(17)には、時の副詞(time adverbials) kinoo 'yesterday' と kyoo 'today' が含まれていて、等位接続が許されている。このような時の副詞は、通例、名詞句内に生起することはない。(17)では、被接続要素の内部に時の副詞が許されていることから、名詞句が等位接続されているというよりは、文が等位接続されているIP-coordinationであると分析すべきであるとKoizumi(2000)は主張する。

⁴ Koizumi (2000)では、動詞句はVPまたはvPとされている。しかしながら、本稿の議論においてVPまたはvPの違いは問題とはならないので、動詞句をVPと表記することにする。

2. 2 種類の遊離数量詞

2.1. 構成素性と等位接続

前節で概観した先行研究から、数量詞が遊離した構文における名詞句と遊離数量詞の構成素性が未解決の問題であると言うことができる。すなわち、Koizumi(2000)が提案するように、日本語にも顕在的動詞上昇が存在するとするならば、遊離数量詞構文の名詞句と遊離数量詞の構成素性には2種類あるとした神尾(1977)の分析を再吟味する必要がでてくる。というのは、Koizumi(2000)の分析を仮定すると、数量詞とそれが修飾する名詞句は構成素を成さず、VPあるいはIPに支配されるとする分析を提案することが可能になるからである。この点を考えるために、ここでは、名詞句と遊離数量詞が構成素を成すと分析される例及び構成素を成さないと分析された例を、(18)として再録する。

- (18) a. 学生が三人つかまった
b. 日本人が昨日二人殺された

神尾(1977)は、(18a)では「学生が三人」は名詞句を成し、(18b)では「日本人が」と「二人」は構成素を成さず、IPに直接支配されると分析した。しかしながら、Koizumi(2000)の顕在的動詞上昇に基づく分析を仮定すると、(18a)の「学生が」と「三人」、(18b)の「日本人が」と「二人」がそれぞれ構成素を成さず、VPあるいはIPに直接支配されていると分析することが可能となる。

これからの議論を理解する上で、構成素性と等位接続の関わりに関して、要点をまとめておくことにする。神尾(1977)の分析では、名詞句と遊離数量詞の構成素性に関して、名詞句という構成素を成す場合と成さない場合の2種類があったが、Koizumi(2000)では、名詞句と遊離数量詞の構成素性に関して、動詞句(VP)あるいは節(IP)という領域の中で、Miyagawa(1989)の提案のように、名詞句という統語的構成素を成すのではなく、名詞句と遊離数量詞が非構成素として基底で直接生成される可能性が存在することになる。

2.2. 帰一連鎖と非帰一連鎖：川添(2002)が指摘する Koizumi(2000)の問題点

川添(2002)は、Koizumi(2000)の顕在的動詞上昇に基づく遊離数量詞の構成素性を批判し、(18a)のような連鎖は名詞句の等位構造であると主張する。川添(2002)は、「学生が三人」のような遊離数量詞と名詞句だけから成る連鎖を「帰一連鎖」と呼び、(18b)の「日本人が昨日二人」のような遊離数量詞と名詞句以外の表現を含む連鎖を「非帰一連鎖」と呼んで区別し、帰一連鎖と非帰一連鎖を同列に扱うのは適切ではないと主張する。川添(2002:163)が擁護しようとしている考えは、神尾(1977)、Kawashima(1998)などの立場で、次の(19)のように、まとめることができる。

- (19) 遊離数量詞は、それが修飾する名詞句と全体で一つの名詞句をなす場合がある。

Koizumi(2000)の顕在的動詞上昇に基づく分析では、名詞句+格助詞+遊離数量詞の連鎖に対して、名詞句を成すとの分析を否定しているわけではないが、顕在的に動詞が上昇した結果得られる動詞句(VP)であると分析される可能性が生じる。このKoizumi(2000)の分析に対して、「と」による等位接続に基づく構成素テストからKoizumi(2000)の問題点を指摘し、名詞句+格助詞+遊離数量詞の連鎖が名詞句を成すことを立証しようとしている。これは、遊離数量詞と名詞句の構成素性に関して、名詞句+格助詞+遊離数量詞の連鎖には、帰一連鎖・非帰一連鎖の2種類があることを論じるものである。

ここで、川添(2002)が指摘するKoizumi(2000)の問題点を概観する。帰一連鎖と非帰一連鎖では、単独名詞句との等位接続に関して違いがあることが指摘されている。すなわち、帰一連鎖は、単独名詞句と「と」で等位接続することができ、非帰一連鎖はできない。この点を、(20-21)を例にとり、考えてみることにする。

- (20) [=(3)] a. 私は年賀葉書を二百枚と大きなゴム印(と)を注文した
b. 学生が三人と一人の教師(と)がつかまった

- (21) a. * 太郎は[花子に3枚]と[次郎に] CDをあげた。
b. * [太郎が3本]と[次郎が] フルボトルのワインを一気のみした。

(川添 2002: 169)

(20-21)は、いずれも動詞句の等位構造を含む文であると分析することになるKoizumi(2000)の問題となる。というのは、文法的な(20)とは対照的に、動詞句が等位接続されている(21a, b)に顕在的動詞上昇を適用することにより、文法的な文として導くことが可能だからである。しかしながら、(20)と(21)には明確な文法性の違いがある。従って、(20)と(21)を同列に扱うことには問題があると川添(2002)は主張する。

また、単独名詞句との等位接続が成されている(21)は非文法的であるが、次の(22)に示されているように、両方の被接続要素に数量詞が含まれている場合には、非帰一連鎖の等位接続が許される。

- (22) a. 太郎は、[花子に3枚]と[次郎に2枚] CDをあげた。
b. [太郎が3本]と[次郎が4本] フルボトルのワインを一気のみした。

(川添 2002: 167-8)

川添(2002)は、非帰一連鎖の等位接続においては、接続されている両方の被接続要素に必ず数量詞が含まれていなければならないとする規定を仮定しなければならないKoizumi(2000)の分析は妥当性に欠け、非帰一連鎖が動詞句であるならば、等位接続される動詞句内に数量詞が含まれていなければならない理由はないと指摘する。このように、川添(2002)は、「と」による等位接続に基づ

く事実から、帰一連鎖が名詞句となるのに対し、非帰一連鎖が名詞句になりえないと主張する。

3. 遊離数量詞の構成索性

川添(2002:174)では、非帰一連鎖の統語的位置付けについては、動詞句とする Koizumi(2000)の主張が適切ではないとの指摘があるが、具体的な分析の提案は今後の研究課題であるとされている。本節では、帰一連鎖と非帰一連鎖の特徴付けを行ない、構成素がどのような範疇から構成されているかに着目し、帰一連鎖と非帰一連鎖を統合した分析を提示する。このような構成素の範疇に言及する分析に基づき、帰一連鎖と非帰一連鎖が関わると川添(2002)が分析した現象に対して、再分析を加えることにする。

3.1. 帰一連鎖と非帰一連鎖の統合

川添(2002:165)による帰一連鎖と非帰一連鎖の特徴付けは、次の(23)である。

(23) 帰一連鎖：数量詞とそれが修飾する名詞句だけからなる連鎖

非帰一連鎖：「と」によって等位接続できる連鎖のうち、帰一連鎖以外のもの

帰一連鎖を含む文と非帰一連鎖を含む文は、概略、次の(24)と(25)のような文のことである。

(24) a. [学生が3人] 来た。

b. [年賀八ガキを200枚] 注文した。

(25) a. [学生が昨日3人] 来た。

b. 太郎は、[花子に3枚] CDをあげた。

c. [太郎が100メートル] 走った。

d. 今年は、[修士の学生が3人] 増えた。

e. 太郎は、[東京の親戚に2箱] リンゴを送った。

川添(2002)の特徴付けでは、名詞句+格助詞+数量詞から成る連鎖がどのような範疇から成るものであるかの視点が欠けている。この範疇に言及することがなく分析が提示されているので、分析に曖昧さが目立つように思われる。川添(2002)の帰一連鎖とは、概略、名詞句+「が」「を」格助詞+数量詞から成る連鎖に相当する。一方、非帰一連鎖とは、Koizumi(2000)が主張するように、動詞句を成す連鎖であると分析することができる。⁵ このような仮定のもとで、(23)にある帰一連

⁵ 名詞句+「が」「を」格助詞+数量詞から成る連鎖には、神尾(1977)が主張するように、名詞句という構成素を成す場合と構成素を成さずに文に直接支配される場合の2種類ある。本稿では、一般化(26)の格助詞が「が」「を」格助詞の場合で、名詞句という構成素を成しているのが、川添(2002)の帰一連鎖に相当すると分析する。しかしながら、「が」「を」格助詞が出現しているからと言って、それがすべて名詞句を成すと主張しているわけではないことに注意されたい。「が」「を」格助詞が名詞句に付加されている場合でも、川添(2002)の非帰一連鎖を成す事例が存在するのである。また、先行研究で示されているように、いわゆる「が」「を」の格助詞が名詞句に付加されている時には数量詞遊離が許されるが、「に」「から」「で」等の格助詞が後置詞を形成する時には一般に許されない。(Haig 1980, 井上 1978, Kuno 1978, Shibatani 1977, 1978等を参照のこと。)

鎖と非帰一連鎖の特徴付けを、次の(26)のように、まとめることができる。⁶

(26) 名詞句 + 格助詞 + 数量詞(あるいは副詞)から成る連鎖は、名詞句あるいは動詞句という構成素を成す。

川添(2002)が帰一連鎖と分析するものは名詞句という構成素を成す場合であり、他方、非帰一連鎖と分析するものは動詞句という構成素を成す場合に相当する。

3.2. 疑似分裂文

このように分析することの利点の一つに、川添(2002)の結語で述べられている、疑似分裂文(pseudo-cleft sentence)の取り扱いに明確な基準が示されることにある。川添(2002: 176-7)は、次に(27)を例にとり、疑似分裂文の焦点の位置に生じている連鎖が、名詞句から成る、帰一連鎖が生じている証拠にはならないとする。

- (27) a. 学生が買ったのは[本を3冊]だ。(Kawashima 1998: 3)
- b. ジョンが買ったのは[リンゴを昨日3つ]だ。(Koizumi 2000: 263)
- c. 太郎があげたのは[花子にCDを]だ。(川添 2002: 177)

(27b, c)のような疑似分裂文が許容されるのだから、(27a)の焦点の位置に生じている「本を3冊」が名詞句という帰一連鎖を成すかどうかの証拠にはならないと主張する。しかしながら、本稿での(26)を組み込んだ分析のもとでは、(27)の疑似分裂文の焦点の位置に何が生じているのかについて明確な区別が可能である。すなわち、疑似分裂文の焦点の位置に、(27a)では「本を3冊」という構成素としての名詞句(川添(2002)の言う帰一連鎖に相当する。)(27b, c)では「リンゴを昨日3つ」「花子にCDを」という動詞句(川添(2002)の言う非帰一連鎖に相当する。)が生じていると分析することが可能となる。

3.3. 構成素としての被接続要素

第二に、川添(2002: 166)は、註4で、「と」で等位接続されるものが必ず構成素でなければならないという条件が適切かどうか問題になると主張する。この点を、次の(28)を例に取り、考えてみることにする。

⁶ 川添(2002)は、非帰一連鎖を成す数量詞が副詞であると分析している。遊離数量詞が動詞句副詞として機能することに関しては、Dowty & Brodie (1984), Fujita (1993), Ishii (1999), 佐藤(2002)を、二次述語であるとする分析に関しては、Ueda (1986), Miyagawa (1989), Miyamoto (1996)を、二次的主語であるとする分析に関しては、Takami (1998), 高見(2001), 高見・久野(2002)を参照されたい。また、Kimura (1993)は、遊離数量詞がWH語である時に、付加詞としての特徴を示すことを指摘している。

- (28) a. ? 日産は、[中国に乗用車]と[アフガニスタンにトラック]を売った。
 b. この大学は、1つの学部しかないのですか？
 とんでもありません。この大学は、[A地区に理学部]と[B地区に工学部]
 があります。

川添(2002)は、査読者から指摘された(28)のような文において、「と」で等位接続されているものが構成素であると分析できないのではないかと暗示する述べ方をしている。この分析は、明示的に「目に見える」表現のみを考察の対象としていることから生じる分析である。本稿での(26)を組み込んだ分析に基づくと、(28)は動詞句の等位構造を含む文である。というのは、(28)の被接続要素は構成素を成さず、いわゆる川添(2002)の非帰一連鎖を成すからである。⁷ 例えば、(28a)は、Koizumi(2000)が主張する顕在的動詞上昇に基づく分析を仮定すると、(29)に示されているように、それぞれの被接続要素である動詞句から動詞が顕在的に上昇した結果であると分析することができる。⁸

(29) ... [_{VP} [_{VP} 中国に乗用車 _{t_v}]]と[_{VP} アフガニスタンにトラック _{t_v}]]を売った。



(28b)及び非帰一連鎖を構成すると分析される文に対して、同様の分析をすることができる。

3.4. 動詞句としての非帰一連鎖の等位接続

本節では、本稿の(26)を組み込んだ分析に基づく、非帰一連鎖の等位接続の文法性を考察する。本稿の分析では、川添(2002)が非帰一連鎖と分析したものは動詞句を成し、帰一連鎖と分析されたものは名詞句を成す。

3.4.1. 帰一連鎖の等位接続

まず最初に、本稿の分析の観点から、名詞句から成る帰一連鎖の等位接続を考えてみることにする。

⁷ 木村(1985)は、非接続要素が構成素を成しているかどうかに着目し、構成素等位接続構造と非構成素等位接続構造を区別する、等位構造の分析を提案している。また、右方節点上昇の空な照応語(null anaphor)に基づく分析に関しては、Kimura(1985, 1986)を、また、日本語の右方節点上昇(Right Node Raising)に関しては、Saito(1986)を参照のこと。

⁸ Bošković(1997)は、例外的格付与(exceptional Case-marking)構文を考察し、構成素を成さない記号連鎖が等位接続される現象に基づき、顕在的動詞移動(V-movement)と目的語転移(object shift)を仮定する分析を提案している。

(30) 学生が5人来た。

(31) a. 学生が[本を3冊]と[ノートを2冊]買った。(Kawashima 1998: 3)

b. 私は[年賀葉書を二百枚]と[大きなゴム印](と)を注文した

c. [学生が三人]と[一人の教師](と)がつかまった

(30)の「学生が5人」は名詞句+「が」格助詞+数量詞から成る連鎖で、本稿の分析に基づくと、構成素を成す名詞句を構成する帰一連鎖である。従って、(31a)のように、名詞句+「を」格助詞+数量詞から成る連鎖の等位接続も可能であるし、(31b, c)のように、名詞句+「が」格助詞+数量詞は名詞句との等位接続も可能である。すなわち、同じ範疇が等位接続されることを要求する、等位構造に課されている一般的な条件を満たしているから、(31)は文法的なのである。

3.4.2. 非帰一連鎖と非帰一連鎖の等位接続

次に、川添(2002)の非帰一連鎖と非帰一連鎖の等位接続、本稿の分析では構成素としての動詞句の等位接続を考えてみることにする。

(32) 学生が昨日5人来た。

(33) a. 太郎は、[花子に3枚]と[次郎に2枚]、CDをあげた。

b. [太郎が100メートル]と[次郎が100メートル]走った。(川添2002: 168)

c. 今年は、[修士の学生が3人]と[博士の学生が2人]増えた。(川添2002: 174)

(32)の「学生が昨日5人」は名詞句+格助詞+副詞+数量詞から成る連鎖で、これらの語から成る記号列は構成素ではないが、Koizumi(2000)の顕在的動詞上昇分析を仮定すると、構成素を成す動詞句を構成する非帰一連鎖であると考えることができる。(33)に示されているように、動詞句を構成する非帰一連鎖の等位接続は、動詞句と動詞句が等位接続されていて、等位構造に課される一般原理に違反しておらず、(33)は文法的である。

3.4.3. 非帰一連鎖と帰一連鎖の等位接続

第三に、川添(2002)がKoizumi(2000)の問題点として指摘する文を、本稿の分析のもとで、考えてみることにする。

(34) a. * 太郎が[花子に3枚]と[次郎に]CDをあげた。

b. * [太郎が100メートル]と[次郎が]走った。(川添2002: 170)

c. * 今年は、[修士の学生が3人]と[博士の学生が]増えた。(川添2002: 174)

(26)の仮説を組み込んだ本稿の分析では、(34)の非文法性に原理的な説明を与えることができる。(34a)では動詞句「花子に3枚」と後置詞句「次郎に」が、(34b)では動詞句「太郎が100メートル」と名詞句「次郎が」が、(34c)では動詞句「修士の学生が3人」と名詞句「博士の学生が」が等位接続されている。⁹このような等位接続は、等位構造に課されている一般的な原理、すなわち、同じ範疇が等位接続されるとの規定に違反している。従って、(34)は非文法的であると説明することができる。川添(2002:174・5)が指摘する、非帰一連鎖の等位接続では両側の要素に数量詞がなければならないとする規定は、本稿の分析に従うならば、何ら規定しておく必要はない。等位構造に課される一般的条件のもとで非文法的となると説明されることになる。すなわち、数量詞が両方の被接続要素に必要とされるのは、等位構造に課される、同じ範疇が被接続要素になることを要求する条件の帰結である。片方の被接続要素にのみ数量詞が含まれている場合は、同じ範疇が等位接続されることを要求する条件に違反することから、非文法的になるのである。

3.5. 異なる後置詞句の出現

川添(2002:175)は、非帰一連鎖の等位接続において、格助詞「へ」「から」でマークされる後置詞句が含まれていても、同じ後置詞句である必要がないと指摘する。最後に、この現象を考察することにする。

- (35) a. 太郎は[東京の親戚に2箱]と[その他に5箱]、リンゴを送った。
b. [太郎から花子へ2通]と[その他に3通]、FAXが送られた。

本稿の分析に従えば、(35)は、構成素としての動詞句から成る非帰一連鎖の等位構造を含む文である。この分析が正しいとするならば、動詞句内に、どのような付加的な語(adjuncts)が生じても許されるはずである。まさに、(35)は、非帰一連鎖を成す記号列が動詞句であることの証拠であるように思われる。¹⁰

4. 結 語

本稿では、名詞句+格助詞+数量詞の連鎖を成す、遊離数量詞の構成素性に対する3つの分析を第1節で、顕在的動詞上昇分析を提案するKoizumi(2000)の不備を指摘する川添(2002)の分析を第2節で概観し、川添(2002)が提案する帰一連鎖と非帰一連鎖は、構成素の範疇に着目することに

⁹ 格助詞「が」「を」は、名詞句にチョムスキー付加され、全体として名詞句を成し、格助詞「から」「で」「に」等は後置詞句の主要部(head)で後置詞句を投射する。この点に関しては、注5も参照のこと。

¹⁰ 同じ統語範疇の句が等位接続されるとする分析は基本的には妥当な分析ではあるが、統語範疇が異なる場合でも等位接続が認可され、その一方で、同じ統語範疇だからといって常に等位接続が許されるわけではない。X-bar階層に基づき、同じパーレベルにある句が等位接続されることを要請する構造上の平行性に基づく分析については、木村(1992)を参照のこと。

より、統一的な扱いが可能になることを指摘した。すなわち、1)川添(2002)が帰一連鎖と分析するものは、構成素としての名詞句を成すこと、2)非帰一連鎖と川添(2002)が分析した記号列は、構成素としての動詞句(VP)あるいは節(IP)を成すものであることを論じた。このように統一的な扱いが可能となるのは、構成素を成す被接続要素と構成素を成さない被接続要素を明確に区別するという、等位構造に関する、木村(1985)の分析を採用することによって、可能になることを指摘した。従って、本稿の分析が正しいとするならば、等位構造の構成素性を的確に捉えることのできる、Koizumi(2000)の分析の妥当性を示すことができたように思われる。

REFERENCES

- Bošković, Željko 1997. "Coordination, Object Shift, and V-Movement," *Linguistic Inquiry* 28:2, 357-365.
- Chomsky, Noam 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, Noam 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam 1998. *Minimalist Inquiries: the Framework*. MIT Occasional Papers in Linguistics 15, MIT.
- Dowty, David & Belinda Brodie 1984. "The Semantics of "Floated" Quantifiers in a Transformational Grammar," *WCCFL* 3, 75-90.
- Fujita, Naoya 1993. "Floating Quantifiers and Adverbs in Japanese," ms., University of Rochester.
- Haig, John 1980. "Some Observations on Quantifier Float in Japanese," *Linguistics* 18, 1065-1083.
- Ishii, Yasuo 1999. "A Note on Floating Quantifiers in Japanese," in Masatake, Muraki & Enoh Iwamoto (eds.) *Linguistics: In Search of the Human Mind - A Festschrift for Kazuko Inoue*, 236-267, Kaitakusha, Tokyo.
- 井上和子 1978. 『日本語の文法規則』大修館書店
- 神尾昭雄 1977. 「数量詞のシンタックス」『言語』vol.6, no.9, 83-91.
- 神尾昭雄 1983. 「名詞句の構造」井上和子編『日本語の基本構造』, 77 - 126 , 三省堂書店
- Kawashima, Ruriko 1998. "The Structure of Extended Nominal Phrases: The Scrambling of Numerals, Approximate Numerals, and Quantifiers in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 7, 1-26.
- 川添 愛 2002. 「「と」による等位接続と遊離数量詞」『言語研究』122号, 163 - 180.
- Kitahara, Hisatsugu 1993. "Numeral Classifier Phrases Inside DP and the Specificity Effect," *Japanese/Korean Linguistics* 3, 171-186.
- 木村宣美 1985. 「等位接続構造の句構造規則に基づく分析」『英文学研究』第62巻第1号, 127 - 139.
- Kimura, Norimi 1985. "An Interpretive Analysis of Right Node Raising in English," *Tsukuba English Studies* 4, 63-88.
- Kimura, Norimi 1986. "Right Node Raising: A Null Anaphor Analysis," *English Linguistics* 3, 118-133.
- 木村宣美 1992. 「等位構造と構造上の平行性」『文経論叢』第27巻第3号, 弘前大学人文学部, 121 - 137.
- 木村宣美 1993. "Japanese Quantifier Float: An ECP Account," 『文経論叢』第28巻第3号, 弘前大学人文学部, 73 - 102.
- Koizumi, Masatoshi 2000. "String Vacuous Overt Verb Raising," *Journal of East Asian Linguistics* 9, 227-285.
- Kuno, Susumu 1978. "Theoretical Perspectives on Japanese Linguistics," in Hinds, John & Irwin Howard (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, 213-285. Tokyo: Kaitakusha.

- Miyagawa, Shigeru 1989. *Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.
- Miyamoto, Yoichi 1996. "Floating Quantifiers and the Stage/Individual-Level Distinction," *Japanese /Korean Linguistics* 5, 321-335.
- Muromatsu, Keiko 1999. "Determiners and Nouns," 『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書』平成11年度 , 377 - 414.
- 奥津敬一郎 1969. 「数量的表現の文法」『日本語教育』14号, 42 - 60.
- 奥津敬一郎 1983. 「数量詞移動再論」『人文学報』第160号, 東京都立大学人文学部, 1 - 24.
- 奥津敬一郎 1996a. 「数量詞移動 その一」『日本語学』第15巻第1号, 112 - 119.
- 奥津敬一郎 1996b. 「数量詞移動 その二」『日本語学』第15巻第2号, 95 - 105.
- Ross, John Robert 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Doctoral Dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru 1986. "Three Notes on Syntactic Movement in Japanese," in Imai, Takashi & Mamoru Saito(eds.) *Issues in Japanese Linguistics*, 301-350, Dordrecht: Foris Publications.
- 佐藤香織 2002. 「イベント名詞句補部からの数量詞遊離現象」『日本語文法』第2巻第2号, 112 - 127.
- Shibatani, Masayoshi 1977. "Grammatical Relations and Surface Cases," *Language* 53:4, 789-809.
- Shibatani, Masayoshi 1978. "Mikami Akira and the Notion of 'Subject' in Japanese Grammar," in Hinds, John. & Irwin Howard(eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, 52-67. Tokyo: Kaitakusha.
- Takami, Ken-ichi 1998. "Passivization, Tough-Movement and Quantifier Float: A Functional Analysis Based on Predication Relation," *English Linguistics* 15, 139-166.
- 高見健一 2001. 『日英語の機能的構文分析』鳳書房
- 高見健一・久野暉 2002. 『日英語の自動詞構文』研究社
- Terada, Michiko 1990. *Incorporation and Argument Structure in Japanese*. Doctoral Dissertation, University of Massachusetts.
- Ueda, Masanobu 1986. "Quantifier Float in Japanese," *Sophia Linguistica* 20/21, 103-111.